

〈資料の紹介と研究〉 帝国実業講習会と渋沢栄一の『実践商業道德講話』

——大正期実業教育の一側面—— (中)

野 崎 敏 郎

〔抄 録〕

『実業講習録』シリーズは、1915 年から 1922 年まで、比較的の小規模な改訂が加えられ、1923 年には大規模な刷新が企てられる。このとき、帝国実業講習会総裁である渋沢は、シリーズのなかに「商業道德」編を組み入れることを望み、みずからその任に当たった。第一次世界大戦後の国際情勢は、日本の経済・産業にとって好機とみられたが、この『講話』は、こうした浮かれた風潮に冷水を浴びせかけるかのような手厳しい論調を有しており、日本の国益をこそ最優先せよという彼の年来の主張が前面に押しだされている。彼はまず、人が社会の一員として立つ以上は、その世にたいして尽くさなくてはならないと論じ、経済によって道德が活動し、道德によって経済が永続することを指摘し、信用の重要性を説いていく。

キーワード：実業教育、渋沢栄一、実業之日本社、商業道德、関東大震災

1915 ～ 16 年の実業講習録シリーズ

1915 年の新学期直前の広告をみると、商業簿記、銀行簿記、商事要項、商業英語、商業作文、商業数学、珠算諳算、商業実務、商業地理、経済講話、実業読本、商品学、実業史、処世法、成功実例の 15 科目が掲げられている⁽²¹⁾。

前年と比較すると、「法制」「習字」がなくなり、「成功実例」が加えられている。小規模な手直しとみてよからう。

1916 ～ 17 年の実業講習録シリーズ

1916 年開始のシリーズ広告では、前年の科目のうち「成功事例」がなくなり、「習字練習」に差しかわられる⁽²²⁾。第一号の内容は、「実業読本」「商事要項」「商業簿記」「経済講話」「商品学」「商業作文」「商業英語」「処世法」等とされている⁽²³⁾。このことから、雑誌版の本講連

載は、これらの科目から開始されたことがわかる。なお、別の広告では、「科外講話」も加えられて16科目となっている⁽²⁴⁾。

1917～18年の実業講習録シリーズ

このシリーズでは、商業簿記、銀行簿記、商事要項、商業英語、商業作文、商業数学、珠算、諳算、商業事務、商業地理、経済講話、実業読本、商品学、実業習字、実業史、処世法、科外講話の16科目が掲げられている⁽²⁵⁾。このとき、創立五周年を記念して「内容に改訂を施」したとされており、また「書翰文習字」（ペン字のことだと思われる）の「大附録」が毎月一日号に添えられている⁽²⁶⁾。

1918～19年の実業講習録シリーズ

このシリーズの科目構成は前年と同一である。また「書翰習字」は好評だったようで、ひきつづき附録提供されている⁽²⁷⁾。

1919～20年の実業講習録シリーズ

このシリーズにおいては、「欧洲戦乱の生める経験に鑑み」て、内容の刷新が図られている⁽²⁸⁾。この「平和克復第一年」にあたって、「講義全部を大改正し講師と科目とを改め」、さらに「工業の新科目」を加えて、「世界の大勢に順応する有為の平和的戦士を養成」しようとしたとされている。科目と担当執筆者は以下の通りである⁽²⁹⁾。

①石川文吾『商業通論』	⑩青木利三郎『商品と地理』
②玉水千市『商業各論』	⑪井関十二郎『商業実務』
③河津暹『経済学講話』	⑫河合匡・太田勤治『工業通論』
④中村茂男『商業簿記』	⑬秋保安治『工場実務』
⑤太田哲三『銀行簿記』	⑭吉田良三『工業簿記』
⑥佐川春水『商業英語』	⑮三山喜三郎『化学工業』
⑦小林行昌『商業数学』	⑯西脇呉石『実用習字』
⑧村林専之助『珠算と諳算』	⑰増田義一『新処世法』
⑨杉山令吉『商業作文』	⑱高野復一・堀越善重郎・堀江帰一・原田四郎・鴨居武『科外講話』

この年に、『実業講習録』を学習して卒業した者は「数十万」に達し、彼らは、会社・銀行・商店において重要な地位を占めつつあると伝えられている⁽³⁰⁾。

1920～21年の実業講習録シリーズ

この年次のシリーズの内容は前年と同一であるが、『科外講話』の担当者は「専門大家十数名」とされているので、この講話の内容は刷新されたのかもしれない⁽³¹⁾。現物を確認できないので、詳細は不明である。

1921～22年と1922～23年の実業講習録シリーズ

1921～22年および1922～23年のシリーズでは、次の講習18科目と担当執筆者が掲げられている⁽³²⁾。

①石川文吾『商業通論』	⑩村林専之助『珠算諸算（珠算と諸算）』
②玉水千市『商業各論』	⑪杉山令吉『商業作文』
③河津暹『経済講話（経済学講話）』	⑫河合匡『工業通論』
④中村茂男『商業簿記』	⑬三山喜三郎『化学工業』
⑤太田哲三『銀行簿記』	⑭井関十二郎『商店実務』
⑥吉田良三『工業簿記』	⑮秋保安治『工場実務』
⑦青木利三郎『商品地理（商品と地理）』	⑯西脇呉石『実用習字』
⑧佐川春水『商業英語』	⑰増田義一『新処世法』
⑨小林行昌『商業数学』	⑱各専門大家十数名『科外講話』

なお、1922年1月10日に、帝国実業講習会総裁だった大隈が死去したため、増田に継承され、副総裁だった渋沢が2月に総裁に就任している（『渋沢資料④』：569頁、渋沢栄一 1923b: 19頁、同 1923c: 1頁）。

1923～24年の実業講習録シリーズ

1922年末に実業講習録の刷新が企画される。その担当執筆者と科目は以下の通りである⁽³³⁾（丸カッコ内の付記は筆者による）。

①渋沢栄一『実践商業道德』（新稿）	⑬原口亮平『商業数学』（新稿）
②石川文吾『商業通論』（前年と同内容か）	⑭神尾錠吉『諸算と珠算』（新稿）
③小林行昌・橋本良平『商業各論』（新稿）	⑮杉山令吉『商業作文』（前年と同内容か）
④河津暹『経済学』（新稿と推定）	⑯上野陽一『商業心理学』（新稿）
⑤小林丑三郎『財政学』（新稿）	⑰依田信太郎『商業実務』（新稿）
⑥三瀨信三『法制講話』（新稿）	⑱豊泉益三・山中民一『店頭装飾法』（新稿）
⑦中村茂男『商業簿記』（前年と同内容か）	⑲井関十二郎『広告術』（新稿）
⑧下野直太郎『銀行簿記』（新稿）	⑳秋保安治『工業常識』（新稿）
⑨吉田良三『工業簿記』（前年と同内容か）	㉑渡邊鐵蔵『工場実務』（新稿）
⑩岡田実麿『商業英語』（新稿）	㉒西脇呉石『実用習字 毛筆 ペン』（前年と同内容か）
⑪星野太郎『商品学』	㉓増田義一『実業青年の修養』（新稿）
⑫阿部秀助『商業地理』（新稿）	㉔専門十数大家『科学講話』

これは、講習会発足から十年を記念した企画で、大半が新たに書きおこされたものである。これをもって、1923年3月に、「創立拾周年」の「春期新学期」が開始される⁽³⁴⁾。

渋沢栄一の『実践商業道德講話』の位置づけ

1923～24年の新版『実業講習録』シリーズは、1923年3月から刊行されはじめる。各月1日・15日に各号が刊行・発送されたものと思われる。これに先立つ1月1日に、渋沢は、「実業講

習録開講の辞」を述べ、同日に『実践商業道德講話』を語っている（渋沢栄一 1923a: 19 頁、同 1923b: 24 頁）。『実業講習録』のそれまでのシリーズには、「商業道德」を主題としたものは含まれていなかった模様であり、帝国実業講習会総裁である渋沢は、新しいシリーズを構築するさい、そのなかに「商業道德」編を組み入れることを望み、みずからその任に当たったのであろう。そしてその連載第 1 回は、新シリーズの基調をしめすものとして、「実業講習録開講の辞」とともに、雑誌版第 1 号に掲載されたと思われる（後出注 44 を参照）。

ところが、後述する震災後再刊時の同誌目次裏広告⁽³⁵⁾では、『商業道德講話』は、全 24 科目中 22 番目に置かれている。後年の広告中一覧でも、渋沢の『実践道德』は、全 32 科目中 31 番目に置かれている⁽³⁶⁾。

おそらく、このときの改訂版シリーズが完結してあらためて全体を見渡したとき、商業通論・各論、経済学、財政学、法制、簿記、英語、商品学、地理、算術、店頭装飾、文書作成、実務、広告、心理、工業と工場といった事項が『実業講習録』の主要部分だと考えられるから、渋沢の『講話』は、実用習字、青年修養論、科外講話とともに、講習録の末尾に置かれることになったのであろう。したがって、『実業之日本』の当初の広告に記されている配列順は、1923～24 年に刊行された雑誌版の掲載順序であり、その後、この講習録を単行本化・体系化したときの順序へと並べかえられて記載されることになったと考えるのが自然である。

しかし、次年度（1924～25 年）以降の新聞・雑誌広告をみると、配列順が、前者であったり後者であったりまちまちなので、次年度以降の刊行・配布順がどの順序だったのかは判然としない。

1928 年の大改訂

確認できたかぎりにおいて、『実業之日本』第 30 巻第 18 号に掲載されている広告までは、全 24 科目の題目と順序が同一なので（目次裏広告、1927 年 9 月 15 日刊）、1923～24 年に内容を刷新された新版『実業講習録』が、その後四年間使用されつづけたことがわかる。そして翌 1928 年になると新シリーズに移行する。このときの広告文は、この講習録を「独学青少年の好指針」と位置づけており、以下のように、講習録の推移と定位とをよくしめしている。

実業学校の収容数には限りがあり、また家庭の事情等で通学できない青年もすくなくない。将来国家社会のために役立つであろうこれらの人々を放置しておくことは「国家の莫大なる損失」であり、またこれらの人々自身にとっても不幸である。そこで実業之日本社は、ここに目をつけ、「大正二年帝国実業講習会を創立し、最新の通信教授によつて是れ等不幸なる青少年諸君の為に完全した実業教育を授くることゝした。学科はすべて甲種商業学校の正課程を標準とし、講師は夫れ夫れの権威ある専門大家に依頼し、講義は極めて平易に、且つ極めて親切を旨とし、以つて身親しく実業学校に在らざるもの、又は既に職業に就けるも実業上の素養に乏しき為めに出世難を嘆ずる人々をして、本会の講義録により、その実際に就学卒業したと同

じ効果を挙げしむるを期して居る。」「本講習録は通信実業教育機関として実に十五年の長き歴史と経験を有し、数回に亘る改訂を以て時代と共に進展し来つたのであるが、今回復々全科目に亘る大改訂を断行し、従来の商業専門学校に国定民通学の全般を加へ、以て商工業の実務界に必要な実力を修得せしむると同時に、模範国民として欠くべからざる教養を与ふるを企図するに及んだ」⁽³⁷⁾。

ここにあざやかにしめされているように、「独学青少年」が、独習によって商業学校卒業生と同レベルの実力と教養とを身につけられるよう助けるのが、この講習録の狙いと定められている。講習録シリーズは、1913～14 年の創刊以来、年々改正が加えられ、教則本の体系的配列へと進化し、1923 年の改訂によって実務性・実用性が高められ、さらに 1928 年の改訂によって、学修レベルの引き上げが図られたのである。

1928 年の改訂によって、科目数は 24 から 32 へと拡大された。それは次の通りである⁽³⁸⁾。

①内池廉吉『商事要項』（新稿）	①⑦村林専之助『珠算誦算（珠算と誦算）』
②河津暹『経済学』	①⑧依田信太郎『商店実務』（新稿）
③岡田実磨『商業英語』	①⑨山中民一『店頭装飾（キンドウ陳列法）』
④岡田誠一『商業簿記』	②⑩井関十二郎『広告術』
⑤太田哲三『銀行簿記』	②⑪上野陽一『商業心理』
⑥吉田良三『工業簿記』	②⑫杉山令吉『商業文』（新稿）
⑦星野太郎『商品学』（新稿）	②⑬杉山令吉『普通文』
⑧平井正武『商業地理』	②⑭西脇呉石『実用習字』
⑨野村兼太郎『商業歴史』（新稿）	②⑮秋保安治『工業常識』
⑩柳楽健治『商業算術』	②⑯渡邊鐵藏『工場実務』
⑪三濱信三『法制講義』	②⑰橋田邦彦『博物 生理学』（新稿）
⑫守随憲治『国語講義』	②⑱鈴木醇『博物 鉱物学』（新稿）
⑬住江金之『代数学』	②⑲亀高德平『化学』
⑭藤野了祐『幾何学』	③⑰田丸卓郎『物理学』
⑮末松直次『博物 植物学』（新稿）	③⑱洪沢栄一『（実践）商業道德講話』
⑯雨宮育作『博物 動物学』（新稿）	③⑲増田義一『修養講座』

前記のように、筆者が入手した内池廉吉の『商事要項』は、文中で例示されている契約書・債券・証券等のサンプルの日付がいずれも昭和 3 年とされているので、1928 年の新シリーズに属していると推察される。これは『商業通論』に該当する包括的なもので、商業従事者が実際に直面する事態を想定して、体系的かつ懇切な解説を提供している。

また同様に、前記の筆者入手本のうち、杉山の『商業文』は「昭和」に入ってからのものであり、『博物』中に大正 13 年の統計が記されており、星野の『商品学』中で 1926 年の統計が引用されており、依田の『商店実務』中で 1925 年の統計が用いられているので、これらの号も、1928 年シリーズにおいて新たに制作されたものであろう。

翌 1929 年になると、前年の 32 科目に「科外講義」と「名士訓話」が加えられ、全 34 科目となる⁽³⁹⁾。前記のように、筆者所蔵の『科外講義』中で昭和 3 年 5 月のポスターが紹介されて

いることから、これは、この1929年に追加された「科外講義」編だと思われる。

『実業講習録』シリーズのその後の展開については、ここでは省略するが、ひとつだけ挙げておくと、1932年には「速成科」が設けられ、10科目を厳選して六カ月で卒業できる簡略化されたカリキュラムが提供されるようになる⁽⁴⁰⁾。

筆者所蔵本の原所有者について

以上の考証を踏まえ、筆者が12冊一括購入したもののシリーズを考証すると、次のようになる。

渋沢栄一『実践商業道德講話』（1923年）

増田義一『実業青年の修養』（1923年）

三瀧信三『法制講話』（1923年）

内池廉吉『商事要項』（1928年）

杉山令吉『商業文』（1928年）

末松直次・雨宮育作・橋田邦彦・鈴木醇『博物』（1928年）

山中民一『キンドウ陳列法』（1928年）

野村兼太郎『商業史』（1928年）

星野太郎『商品学』（1913年初版以来数次改訂、1928年版）

柳楽健治『商業算術』（1928年）

依田信太郎『商店実務』（1923年初版、1928年版）

八大家（宮下孝雄・松宮三郎・志水数雄・青木利三郎・国松豊・増地庸治郎・山口茂・橋本良平）『科外講話』（1929年）

最初の3冊（渋沢・増田・三瀧）は1923年初出だが、1928年版にも引きつがれている。1928年版では、山中のものも含め、タイトルが異なっているが、新聞広告では、紙面節約のため、『キンドウ陳列法』を『店頭装飾』へと変更表記するなどの便宜的省略処理が加えられていると考えると納得できる。そして最後の『科外講話』は、基本的に1928年版を踏襲している1929年版において追加され、このときはじめて登場している。こうして、この12冊は、すべて1929～30年の『実業講習録』シリーズに属しているものと推断できる。筆者入手本の原所有者は、この年のシリーズの購読者だったのであろう。

各冊には、通しのノンブルとともに、雑誌版のノンブルも付されている。たとえば、依田の『商店実務』の場合、「一ノ九一」から「一一ノ九四」まで雑誌版のノンブルが付されており、目次に記されているノンブルは「一三ノ一五三」と「一三ノ一五四」である。つまり、この科目は、雑誌版では第1号から第11号まで連載され、完結後、第13号に目次と扉（表紙）が掲

載されたことがわかる。

この雑誌版のノンブルをチェックすると、各科目の雑誌掲載状況を以下のように復元することができる（各科目初回の掲載順に配列）。

増田義一『実業青年の修養』（雑誌版第 1 ～ 18 号）
内池廉吉『商事要項』（雑誌版第 1 ～ 24 号）
星野太郎『商品学』（雑誌版第 1 ～ 15 号）
依田信太郎『商店実務』（雑誌版第 1 ～ 11 号）
末松直次「博物第一篇 植物学」（雑誌版第 1 ～ 3 号）
宮下孝雄「(科外講話) ポスターの研究」（雑誌版第 1 号）
松宮三郎「(科外講話) 売出しの新研究」（雑誌版第 2 ～ 3 号）
杉山令吉『商業文』（雑誌版第 4 ～ 19 号）
志水数雄「(科外講話) 店頭お客応接法の研究」（雑誌版第 4 ～ 5 号）
雨宮育作「博物第二篇 動物学」（雑誌版第 4 ～ 5 号）
柳楽健治『商業算術』（雑誌版第 6 ～ 24 号）
野村兼太郎『商業史』（雑誌版第 6 ～ 24 号）
橋田邦彦「博物第三篇 生理衛生」（雑誌版第 6 ～ 12 号）
青木利三郎「(科外講話) 科学的荷造法」（雑誌版第 6 ～ 7 号）
国松豊「(科外講話) 科学的管理法の話」（雑誌版第 10 ～ 12 号）
鈴木醇「博物第四篇 鉱物学」（雑誌版第 12 ～ 14 号）
三瀧信三『法制講話』（雑誌版第 13 ～ 21 号）
山中民一『キンドウ陳列法』（雑誌版第 13 ～ 22 号）
増地庸治郎「(科外講話) 社債の話」（雑誌版第 13 ～ 14 号）
山口茂「(科外講話) 景気循環の話」（雑誌版第 15 ～ 17 号）
渋沢栄一『実践商業道德講話』（雑誌版第 19 ～ 24 号）
橋本良平「(科外講話) 会社の見方」（雑誌版第 20 ～ 23 号）

このように、長丁場の体系的な講義のみならず、一回読み切りから四回連載程度の短い「科外講話」をも適宜配し、バラエティに富んだ読み物を並べることによって読者の関心を引きよせ、一年間挫折することなく講習しおえることができるよう工夫されている。

このうち、渋沢の『実践商業道德講話』は、雑誌版第 19 ～ 24 号において、連載されている科目の劈頭を飾り、第 24 号（最終号）で完結したとき、そのすぐあとの頁に目次と扉（表紙）が掲載された。1923 年において『実業講習録』の劈頭を飾っていたこの『講話』は、この年次においては掉尾を飾る位置を与えられているのである。

では、彼の『実践商業道德講話』は、1923～24年版から1929～30年版にいたるまでに、その内容に変更が加えられているのであろうか。たしかに、『実業講習録』は実践性・実用性を重んじており、そのため、各年次の各科目講義担当者は、そのときどきの情勢におうじて改訂を加え、内容をアップデートしているが、管見のかぎりでは——まったくの印象にすぎないが——、1923年初出の渋沢の『講話』は、1929～30年版にいたるまで、とくに改訂されていないようにみうけられる。1929～30年頃においてもなお渋沢は旺盛な著述（口述筆記）活動をおこなっており、1931年11月に没する彼は、この年の『龍門雑誌』9月号にも巻頭言を提供している。しかし、『論語』研究を踏まえて深化した彼の実践道德にかんする見解は、1923年においてすでに確定しており、その後の情勢変化を経ても、とくに書きかえる必要がなかったであろう。また、他の科目は、経済状況の変化や、商法や商業関連の諸規則等の変更に対応して書きかえる必要があるが、商業道德というテーマにはそうした必要性が乏しいという事情もある。

Ⅲ 渋沢栄一の『実践商業道德講話』——成立過程・意義・内容——

渋沢の著述活動と関東大震災

周知のように、渋沢は、その生涯を通じて、「商業道德」について多くを語り、また後年になると、独自の『論語』研究に依拠して「道德経済合一説」を唱えた。その著作活動は、生涯にわたってじつに精力的であり、とくに同人月刊誌『龍門雑誌』（1888年4月創刊）に、大量の記事を——しばしば同一号に複数の記事を——寄稿していた⁽⁴¹⁾。その多くは演説記録や談話であり、彼自身が書いたのではなく、誰かが聴きとって、それを原稿化したものではあるが、それにしてもたいへんな量である。

しかも、『龍門雑誌』への寄稿数は年を追って増加しており、「欧米視察談」をこの雑誌の第174号（1902年11月）から第184号（1903年9月）まで連載して以降は——途中一～二号ほど間が空くことはあっても——ほぼ毎号寄稿しており、第219号（1906年8月）から第426号（1924年3月）までの十八年弱は、毎号欠かさず寄稿している。この事実から、実業家として多方面で活動を続け、また各種団体の代表者としての任務をも励行しつつけた彼が、そうした多忙な日々のなかでも、出版物による啓蒙活動にかんしていかに積極的だったかがわかる。

しかしこの間、^{かん}『龍門雑誌』への寄稿に一度だけ間が空いた時期がある。それが、まさに『実践商業道德講話』が語られた1923年である。『龍門雑誌』第422号が、この年の7月25日付で刊行されたあと、第423号は12月25日付で刊行されており、雑誌そのものが五カ月間休刊したのである。

これは関東大震災の影響である。この年の9月1日11時58分に発生した大地震のため、『龍門雑誌』8月号が刊行できなくなり、その後もしばらくのあいだ休刊を余儀なくされたのであ

る。この間震災復興のために奔走した⁽⁴²⁾ 渋沢は、年末になってようやく再開した『龍門雑誌』において、帝都復興策について考察を巡らしている⁽⁴³⁾。以下に、『実践商業道德講話』と震災にかんする付帯事情をみよう。

渋沢栄一『実践商業道德講話』の成立過程

『実践商業道德講話』の内容の一部は、「実業講習録開講の辞」とともに、震災休刊直前の『龍門雑誌』第 422 号 (1923 年 7 月号) に掲載されており、そこには、「本篇は『実業講習録』に掲載せるものなり」と付記されている⁽⁴⁴⁾ (渋沢栄一 1923b: 19 頁)。したがって、渋沢のこの講話 (のうち、すくなくとも『龍門雑誌』に掲載されている部分) は、すでに 7 月以前に刊行されていたはずである。3 月に刊行が開始された実業講習録シリーズは、7 月末までに 10 冊が刊行されたはずで、また地震が起きた 9 月 1 日までに、実際に第 17 号までが刷りあがっていた (後述)。そのなかに渋沢の『講話』が含まれていたことは確実である。

すでに考証したように、この『講話』は、この年次の『実業講習録』新シリーズの劈頭を飾った可能性が高い。実際、『龍門雑誌』に掲載された紹介記事の末尾には、「一二・一・一」と日付が付されている (渋沢栄一 1923b: 24 頁)。ここから、この『講話』が、もともとこの年の元日に語られたものであることが明らかである。さらに、渋沢の次の日記記述が重要である (『渋沢資料④』: 131 頁)。

一月十五日 雨 寒

午前七時半起床入浴朝食共二例ノ如クシテ後、実業之日本雑誌都倉義一氏ヨリ来レル実業講習録ニ掲載スヘキ、一般信用問題ニ付テノ意見筆記ヲ修正ス、午前午後勉強シテ夕方ニ至リ脱稿ス、依テ一言ヲ都倉氏ニ添ヘテ原稿ヲ郵送ス

彼は、元日に語った「意見筆記」を、1 月 15 日に修正している。彼は、朝食後ただちにこの原稿修正に取りかかり、夕方脱稿し、郵送しているから、要するに、この仕事に丸一日を費やしたのである。このように彼が脱稿を急いだことは、前掲の『実業之日本』第 25 巻第 24 号目次裏広告において、『実践商業道德講話』が実業講習録新シリーズの冒頭に掲げられていたことと符合する。彼は、3 月 1 日発行予定の『実業講習録』第 1 号の発送 (開講) に間に合わせるために一日を潰したのである。

こうした経緯からみて、渋沢の『実践商業道德講話』は、独学する職業青年の能力涵養のために刷新が図られた 1923 ~ 24 年版『実業講習録』の一翼を担うべく、帝国実業講習会総裁みずからが語り、『講習録』連載講座の劈頭を飾った意欲的な著作であることがわかる。第一次世界大戦後の国際情勢は、日本の経済・産業——とりわけ貿易業——にとって好機とみられたが、それに冷水を浴びせかけるかのようなこの『講話』の手厳しい論調は、好況に浮かれる人々

や、安直に事業に手を出そうとする人々にたいして警鐘を鳴らし、日本の国益をこそ最優先せよという彼の年来の主張を前面に押し出すものとなっている。

この『講話』は、1928年の『講習録』改訂にさいしてもひきつづき提供されており、筆者の入手した1929～30年版においても提供されつづけている。

渋沢が1931年に没したとき、帝国実業講習会は広告中に悼辞を寄せる。「故渋沢子爵が我国青少年に残せる唯一のものは『実業講習録』に連載せる道德講話です。是れこそは故渋沢子爵の生命を永遠に伝へる重大且つ光輝ある教訓であります―」「渋沢子爵の志を継ぐことは、本講習録に課せられた責任であり、是れを学ぶ青少年の義務であります」⁽⁴⁵⁾。

渋沢の『講話』は、1932～33年シリーズにおいても供されているが⁽⁴⁶⁾、それ以降は記録上確認できない。実業之日本社は、これ以降、販売戦略上、六カ月の「速成科」コース（ここには渋沢の『講話』は含まれていない）だけに限定したのかもしれない。

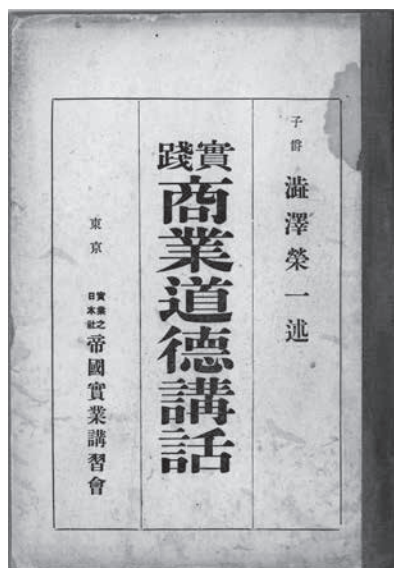
関東大震災と『講話』の再刊

以上のように、この『講話』は、1923年1月1日に語られ、筆記され、1月15日に渋沢によって入念に修正され、その第一回分は、3月1日に刊行されたはずの『実業講習録』第1号に収録されて発送されたと推察される⁽⁴⁷⁾。また、その内容の一部は『龍門雑誌』7月号に掲載される。

しかし、9月1日に発生した巨大地震は、この『実業講習録』シリーズの刊行計画に重大な損失を与える。実業之日本社社屋は全焼し、『実業講習録』を含む四誌は休刊を余儀なくされる⁽⁴⁸⁾。とくに『実業講習録』は、「製本から原版まで全部全焼」し、第1号から、このときすでに印刷されていた第17号までのすべてが失われる。そのため、9月15日発送予定の号（おそらく第14号）からあとはいったん配本中止となる⁽⁴⁹⁾。

不幸中の幸いで、建設中の新社屋が無事だったため、実業之日本社は、ここに移転してただちに事業を再開する。そのさい、震災が発生した9月が『実業講習録』の新学期募集時であったこともあって、新たな購読申込者のために、既刊号をすべて再刊する必要に迫られる。そこで同社はすみやかに再組版に着手し、第1号から第6号までは11月中に、第7号以下は12～1月に刊行することをめざす⁽⁵⁰⁾。そして翌年1月には、全24科目の広告が掲載されているから、実際にこのときまでに、失われた号の再刊が果たされた模様である⁽⁵¹⁾。

なお、年次不明の『実業講習録』見本のなかに、『実践商業道德講話』が「五二頁ノ小冊子」という記述がある（『渋沢資料④』：132頁）。ところが、筆者が入手



した 1929 ～ 30 年版の『講話』の本文は 39 頁であり、目次 2 頁を足しても 41 頁にしかない。

この見本は、実業之日本社が作成し、『実業講習録』の購読を考えている人に無料で配布（送付）されたものである。この見本がいつ作成・配布されたのかは判然としないが、そのときの年次の雑誌版『実業講習録』において「実践商業道德講話」が完結したとき、その最後のノンブルは「五〇」または「五二」だったのであろう。そこで、見本作成者は、この『講話』を「五二頁」の小冊子として紹介したと考えられる。しかし、筆者が入手した 1929 ～ 30 年版においては、この『講話』をはじめとする各科目の割付が二段組に変更され、『講話』は本文 39 頁に圧縮されたと考え、この頁数のズレを説明できる。『実業講習録』を二段組に改めたのは、物資が乏しい状況の下で紙数削減を図ったためなのかも知れない。

渋沢栄一『実践商業道德講話』の構成

前述のように、この『講話』は、もともと渋沢が語ったものを原稿化したものであり、全体が体系的に整理されているというよりも、実業之日本社社員のインタビューに応じて、思いつくまま語ったものを元にして、読みやすさを配慮し、そこに加筆しつついくつかに区分したという体裁である。『講話』全体は六章から成っている。その章題と節題を以下にしめす。章には一から六まで番号が振られている。節は番号を欠いているが、ここでは便宜上通しで 1 から 33 まで番号を振っておく。この節のなかに、さらに小見出しがこまかくつけられている。なお、章題・節題・小見出しは編集者がつけたものと思われる。

(一) 社会に対する責任 1 実業講習録と私の関係 2 社会に対する個人の義務 3 昔の教育と今日の教育との長短 4 己に克つて礼に復るが仁 5 正しき信念を養ふが肝要 (二) 実業家の第一に心懸くべき信用 6 社会民人の生活上一日も欠かれぬもの 7 他人に信用さるゝが立身出世のもと 8 信を表看板として不信を行ふは大悪事 9 信用を以て立つべき商工業者の不信用 10 『嘘も方便』は大なる間違い 11 誠実とは商売の根本要素 12 誠実なる人は最後の勝利を得 13 連邦準備銀行総裁ストロング氏 (三) 実業に必要な知識 14 是非善悪に対する公平なる判断 15 実業に対する維新前の誤れる思想 16 根本的に真正なる知識が必要 17 経済と道德と知識との相互関係	18 岩崎弥太郎氏と古河市兵衛氏 19 如何なる場合にも天道は必ず是 (四) 事物に精神を集中する方法 20 成功と否とは勉強の有無 21 勉強の真の意義 22 多数の事業に従事する私の態度 23 無理な勉強は永続せぬ 24 仕事の手順と緩急とを考へよ (五) 目的を貫徹するに必要な忍耐 25 九仞の功を一簣に欠くことなかれ 26 失敗を悲観する者はけって成功せず 27 所謂『詰まらぬ仕事』にも忠実なれ 28 私が従来事業に対して守つた態度 29 刻苦奮励遂に成功した我貿易業者 30 逆境に処し辛苦に堪ふる心の持ち方 (六) 堅実なる実業青年の戒むべき投機 31 一攫に得たる千金は又忽ち失ふ 32 悪業も時に善業によつて償はれる 33 正当なる商売と投機との異なる所以
---	--

『実業講習録』は、最初から刊行目的で制作されており、聴衆を前にした講演から原稿を起こしたものではない。他の講習録の多く（とくに大学教授の手になるもの）は、最初から《書かれたもの》としての性質を帯びている。しかし、実務家（デパート従業員）が担当した原稿にかんしては、その筆致から、その実務家が語ったものを誰かが整理して作成された形跡を窺うことができる。企画・主宰者である実業之日本社の社員が実務家から聴きとり、それにもとづいて原稿を起こしたのであろう。

渋沢の『実践商業道德講話』の場合、そこにはたしかに《語られたもの》であるという痕跡が色濃く残存している。しかし、『論語』等の古典文献からの引用をみると、原典を傍らに置いて書かれているようにも感じられる。渋沢は、たしかに練達の著述家ではあるが、実業界から引退した後も諸事多忙であること、また高齢（1月1日現在で満82歳）であることから、まず彼がテーマを設定してしゃべり、その速記録にもとづいて、実業之日本社の社員が原稿にまとめ、さらにそこに渋沢が手を入れたものと思われる。そのことは、前掲の1月15日の日記において、丸一日を費やして「意見筆記」を修正したと書かれていることと符合する。

しかも、この修正作業にさいして「勉強」を要したことから、彼は、この修正日に、『論語』等を直接参照しながら、かなり入念に加筆した模様である。彼は、この『講話』において、彼にとってライフワークと言うべき重要な位置を占める「商業道德」というテーマを詳論し、そこにみずからの職業生活と研究活動のエッセンスを盛りこみ、それをできるだけ多くの勤労者に伝えようとしたのであろう。

以下に各章・節の内容を概観する。平易を旨とする『実業講習録』の方針に忠実に則り、この『講話』も、親しみやすい語り口でわかりやすく書かれており、『論語』等から引用するさいには、とくにていねいに咀嚼して解説が与えられている。また、『実業講習録』の他の冊子と同様、本文中のすべての漢字にルビが振られている。

『講話』の内容（一）社会に対する責任

1 実業講習録と私との関係

正式な学校教育を受けることのできない青年のために、実業之日本社が『実業講習録』を発行し、通信教育を始めたとき、増田社長からの依頼で私は副総裁になった。その後大隈総裁が亡くなったので、私が総裁となった。そのさい、自分の名を出している仕事にたいしては、たんに名を貸しているだけでなく、かならず実をなさなくては自分の良心を満足させられないので、この講習録のために愚説を述べたい。

ただし、私自身は、学問的なことにかんする蘊蓄をもちあわせていないので、それは他の専門家たちに譲り、ここでは、老いた実業家の経験から、処世上のことについて、また実践道德について述べたい（渋沢栄一 1923c: 1～2頁）。

2 社会に対する個人の義務

世の中が変化しようとも、自分のみを考え、他人はどうなってもかまわないという観念でこの世に処していくべきものではない。一身一家の幸福を願うのは自然の性情だが、人が社会の一員として立つ以上は、その世にたいして尽くさなくてはならない。それが国民の幸福を増進し、文明をすすめていく人間各自の義務である。自分の都合と同時に、他人の都合も考えなくてはならない。

また、世のため、国家社会のために尽くすには、まず自分自身が完成していなくてはならない。自分はどうなってもかまわないということではなく、世の中のために尽くすことができるように自分を完成することが前提である。『論語』中の有子の言に、「君子は本を務む、本立つて道生ず、孝弟はそれ仁を為すの本か」とある。孝弟の人は自分の上位にあるものを犯すことがない。孝弟の道を家におこなうと、それがやがて国を治める本となる。曾子は、「吾日に三たび吾身を省みる、人の為に謀つて忠ならざるか、朋友と交つて信ならざるか、伝へて習はざるか」と説いている。最後の箇所は、人のために尽くすことが十分か否かを反省せよという意味であり、人のために尽くすだけのことをして、省みて心に恥じ内に疚しいとすることがないと心を安んじるのである（前掲書：2～3頁）。

3 昔の教育と今日の教育との長短

昔の学問は、はじめから高尚なことを修めて、知識のすみかたが権衡を得ていなかった。今日の教育はこうした欠点を除いたようだが、修身と倫理は、その修養方法が親切でなく、効果にも物足りない点があると思う。

欧米においては、家庭における日常の談話でも、宗教にかんじたところが多く、それが、幼年時代から頭脳に沁みこんで、精神教育となる。日曜日には、教会で説教を聴き、神にたいする人の務めを教えられる。日本の家庭はこれと正反対で、母親は子供に修身の話をしない。宗教にも、幼少年者に精神上的の訓練を与える力がない。家庭と社会がこういう状態だから、学校教育も知識授与に傾き、精神修養は忽せにされがちになる。学校で多少精神教育を授けようとしても、家庭においてその土台となるべき訓育が欠けている。こうして、自分の都合のみを考え、自分の利益のみを謀ればよいという誤解が生じ、実業家は自己を利するために勝手なことをしていいかのごとき解釈が生じる。

商売において、売り主と買い主との利害は衝突するようにみえる。しかし、売り主が相当の利益を収め、買い主が相当の代価を払い、買い主は他のところで相当の利益を収めるものである。たとえば、呉服屋は、自分では米をつくらないので、百姓から買う。このとき百姓の生計が成りたつだけの代価を払わなくてはならない。呉服屋の商売が成りたつのは百姓が米を供給してくれるからであり、百姓が衣服に不足しないのは、呉服屋が相当の値で衣服を供給してくれるからである。こうして共に利益し、その関係は切っても切ることのできない密接なもの

なる。社会のすべての人々は、こういう関係で結びつけられ、平和に幸福に生活することができるのである。自分の都合だけを追求すると、結局他人が迷惑するとともに、自分でも損をすることになる（前掲書：3～5頁）。

4 己に克つて礼に復るが仁

孟子が説いたように、人の性は善なるものである。しかし性善の人も、外部の誘惑を受ければわがままとなる。ゆえにつねに注意して不善となることを防がなくてはならない。孔子は、「己に克つて礼に復るを仁となす」と説いた。性は善であっても、利己やわがままのために、その善をくらまされることが間々ある。これを防ぐには克己の力に拠らなくてはならない。情に流されるのも人間の弱点である。克己によってこの弱点を矯正する必要がある。

私は、毎朝多数の来客に面会し、相談されたことには意見を申しあげるようにしている。自分が老人だからといって、相手を粗略に扱いはしない。また多少疲れていても面会する。克己して人のために尽くす考えからである。

根本の修養として、少年時代から日常錬磨していかななくてはならない。学校教育も、知識のほかに精神の修養が必要だが、その精神教育が閑却され、物質的に走りすぎている。これでは、今後の世界的国民として発展する教養が心許ない。学校教育の改善とともに、各人もまた精神上の修養を積むことに力めることが急務である（前掲書：5～7頁）。

5 正しい信念を養ふが肝要

いまの実業界には、信念に乏しい人が多いように思われる。信念に乏しいのは、道理に明らかでないからである。道理が信念として心中に満たされていないから迷わされやすい。実業の進歩を図るためには、知識のみならず、正しい信念を養わなくてはならない。道德を説く人は、損益のことを言うと、それは道德に反するかのごとく誤解しているが、それは道理に反して得た利益だから道德に反するのであって、正しい道理によって得た利益は、これを喜ぶのみならず、長く保護されるものである。孔子も、道に適わない富は嫌悪したが、かならずしも貧賤をよしとしたのではない。ところが、後世の者が、道理に反して得た利益と正しい道理によって得た利益との区別を明らかにせず、富貴功名全般を嫌うべきものとしてしまったから、道德が実際と離れて空論になってしまったのである。実業に従事する者は、道理にもとづいた信念を懐き、実際の事に当たってこれを活用するようにしなくてはならない。経済によって道德が活動し、道德によって経済が永続するものである（前掲書：7～8頁）。

『講話』の内容（二）実業家の第一に心懸くべき信用

6 社会民人の生活上一日も欠かれぬもの

実業家のみならず、すべての人々は、信用がなければ発展することができない。その信用は、

正心に発し、誠意をもっておこなうときに成立する。表面だけ装っても誠意がなければ、いつしかその不誠実が言動に顕れて信用を傷つける。

論語に、「人にして信なくんばその可なるを知らず、大車^{げい}輓なく、小車^{げつ}軌なくんばそれ何を以てか之を行らんや」とある。車の前にある横木（輓・軌）を牛や馬に繋がないと、どんなに優れた牛馬であっても車を動かすことができない。それと同様に、人に信がなければ、才知のある人でも安全に世を処することはできない。

穂積陳重博士によると、「信」の字は、母がその子を哺育する母子間の「したしみ」に発しており、それが親子、同族、社会全体へと拡張され、「親」が「信」に変じた。社会が進化し発達した今日、信は一日も欠くことのできないものである（前掲書：8～9頁）。

7 他人に信用さるゝが立身出世のもと

世の中で立身出世した人は、概してその平生におこなうことが信であり、その信の人であることが信用の元となって、十分にその手腕才能を発揮する機会が与えられることになったのである。商人の場合も、他人から信用されれば、身には資本がなくとも、資本を托され仕事を営むことができる。巨商大賈も、はじめからそうだったのではなく、そのおこないが信であったために着々として発展してきたのである。

私が第一銀行を発展させることができたのも、相応の勢力と信用を維持させてきたからである。私は、自分の地位を利用してこの銀行の金で私利私欲を計るという考えは微塵もなかった。むしろときとして、私財を割いてまでも第一銀行のために尽くした。この行為が人に理解され、私にたいする信用となったのであろうと思う。

信用は、形のあるものではないが、その力は大であり、思いもよらぬ方面にまで及ぶ。交通機関が発達し、新聞雑誌が盛んな今日、信用の力は大きく、逆に一度不誠実をなせば、その不信用もまたたちまち世上に伝わり、その回復は容易でない。

信用について注意すべきは、いかに信が大切であっても、道理の正しくないことについては考えなくてはならないことである。『論語』に、「有子曰く信、義に近ければ言復^ふむべし」とある。信とは人と約諾すること、義とは事の宜しきをいう。復むとはおこなうの意である。人と約束をするときは、それが義であるか不義であるかを考え、道理に適う正しい約束であれば、はじめてこれをあくまでも履行しなくてはならないことになる。約束を守ることは信であるに相違ないが、約束の内容はかならずしも正しくないことがある。正しくない約束を守ることによって信用が増すわけではない。人は、正しい約束を重んずる信の念を盛んにし、約束する事柄が真に道理に適うか否かを鑑別しなくてはならない（前掲書：9～11頁）。

8 信を表看板として不信を行ふは大悪事

信用の基^{もと}である信を浅薄に解し、信の仮面を被っているにすぎない者は、たちまちその仮面

を剥がれ、不信用を来すものである。ある有力な外交官の言によると、各国が正義人道を標榜しているが、内心は優勝劣敗であり、現実には弱肉強食がおこなわれている。ゆえに、世人も各国政策の表裏を鑑別し、標榜するところに眩惑されず、時代遅れとならないように心懸けなくてはならないという。これを聞いて、私は、このように立派な人がどうしてこういう説を述べたのかと驚いた。英米人のあいだに優勝劣敗がおこなわれているからといって、日本人もそうでなくてはならないという理由はない。こういう説を信ずることは、かならず悪い結果を来すものである。表面に正義人道を唱えても、心に誠実の念がなければ、いつしかその不誠実が言語にも行為にもあらわれてくる。欧洲大戦（第一次世界大戦）の前の各国は、表面では平和主義を唱えながら、内実は軍備を整えて戦争を準備していた。この不誠実が欧洲大戦を招いたのである。各国の政治家・外交家は、己を欺き他を欺いていた。互いに相欺いているようでは、内政治安も円満な外交も期待できない。この外交官の言もそうである。これでは、世界は毫も進歩なく、ますます貪欲増長し、寒心すべき結果を来すであろう。

実業上でも事情は同じである。信を表看板としながら、信用に乗じてこれを害用すれば、不信用を来すのみならず、社会も多くの迷惑を受ける（前掲書：11～12頁）。

（未完）

〔注〕

- (21) 『東京朝日新聞』第10257号（1915年2月4日付朝刊）広告（1面）。
- (22) 『東京朝日新聞』第10775号（1916年7月6日付朝刊）広告（1面）。
- (23) 『東京朝日新聞』第10784号（1916年7月15日付朝刊）6面。
- (24) 『東京朝日新聞』第10834号（1916年9月3日付朝刊）広告（1面）。
- (25) 『東京朝日新聞』第10960号（1917年1月7日付朝刊）広告（1面）、『実業之日本』第20巻第9号（1917年4月15日刊）広告（目次裏）。
- (26) 『東京朝日新聞』第10972号（1917年1月19日付朝刊）広告（1面）。
- (27) 『東京朝日新聞』第11328号（1918年1月10日付朝刊）広告（1面）。
- (28) 『読売新聞』第15011号（1919年1月16日付朝刊）6面。
- (29) 『東京朝日新聞』第11690号（1919年1月7日付朝刊）広告（1面）。

なお、放送大学図書館に、この年の『実業講習録』第1号、第3号が所蔵されている。そこに掲載されている科目は以下の通りである。

【本講】	
①石川文吾『商業通論』	⑦杉山令吉『商業作文』
②河津暹『経済学講話』	⑧村林専之助『珠算と謄算』
③中村茂男『商業簿記』	⑨西脇呉石『実用習字』
④佐川春水『商業英語』	【科外講話】
⑤河合匡『工業通論』	①奥田竹松『流行と商品』（第1号）
⑥青木利三郎『商品と地理』	②増田義一『新处世法』
	③野島常次郎『ファイリング式事務法』（第3号）

- (30) 『読売新聞』第15125号（1919年5月10日付朝刊）7面。
- (31) 『東京朝日新聞』第12058号（1920年1月14日付朝刊）広告（1面）。
- (32) 『東京朝日新聞』第12453号（1921年2月12日付朝刊）広告（1面）、『実業之日本』第25巻第18号（1922年9月15日刊）広告（目次裏）。

- (33) 『実業之日本』第 25 巻第 24 号 (1922 年 12 月 15 日刊) 広告 (目次裏)。
 (34) 『実業之日本』第 26 巻第 6 号 (1923 年 3 月 15 日刊) 広告 (目次裏)。
 (35) たとえば『実業之日本』第 27 巻第 2 号 (1924 年 1 月 15 日刊) 広告 (目次裏)。
 (36) 『実業之日本』第 31 巻第 2 号 (1928 年 1 月 15 日刊) 23 頁。
 (37) 『実業之日本』第 31 巻第 4 号 (1928 年 2 月 15 日刊) 42 ～ 43 頁。
 (38) 『東京朝日新聞』第 14963 号 (1928 年 1 月 10 日付朝刊) 広告 (1 面)。
 (39) 『東京朝日新聞』第 15537 号 (1929 年 8 月 7 日付朝刊) 広告 (1 面)。

なお、埼玉県立浦和図書館に、この年の『実業講習録』第 5 号 (1929 年 2 月 1 日刊) が所蔵されている。そこに掲載されている科目は以下の通りである。

①増田義一『実業青年の修養』	⑨依田信太郎『商店実務』
②内池廉吉『商事要項』	⑩秋保安治『工業常識』
③河津暹『経済学』	⑪亀高德平『实用化学講話』
④岡田誠一『商業簿記』	⑫西脇呉石『实用習字』
⑤岡田実麿『商業英語』	⑬守随憲治『国語講義』
⑥星野太郎『商品学』	⑭杉山令吉『商業文』
⑦平井正武『商業地理』	⑮雨宮育作『博物講義 動物』
⑧村林専之助『珠算と謄算』	⑯志水数雄『科外講話』

- (40) 『東京朝日新聞』第 16765 号 (1932 年 12 月 27 日付朝刊) 広告 (10 面)。

なお、1934 年の速成科版『実業講習録』第 2 号・第 3 号・第 6 号が佐賀大学図書館に所蔵されている。そこに掲載されている科目は以下の通りである。

①内池廉吉『商事要項』	⑥太田哲三『銀行簿記』
②河津暹『経済学』	⑦柳楽健治『商業算術』
③三濤信三『法制講話』	⑧村林専之助『珠算と謄算』
④岡田実麿『商業英語』	⑨杉山令吉『商業文』
⑤岡田誠一『商業簿記』	⑩西脇呉石『实用習字』

- (41) 渋沢と龍門社および『龍門雑誌』との関係については、小野健知と安彦正一が論じている (小野健知 1997: 364 ～ 389 頁, 安彦正一 2002)。
 (42) 震災復興のための渋沢の献身的な取り組みについては詳細にまとめられている (渋沢史料館編刊 2010)。
 (43) 『龍門雑誌』第 423 号 (1923 年 12 月) 11 ～ 22 頁。
 (44) 『龍門雑誌』第 422 号 (1923 年 7 月) に掲載された「実業講習録開講の辞」と「実践商業道德講話」の二編の成立事情にかんして、留意すべき事項が三点ある。

第一に、「開講の辞」は、元日に誰にたいして語られたものなのかという点である。「この講習録は諸君がこれから実業家として身を立て家を起す〔興す〕に必要な学科を掲げてゐる」と語られていることから (渋沢栄一 1923a: 16 頁)、これは講習録受講者に向けて語られているのだが、受講者は、募集中の 1923 ～ 24 年シリーズ (1923 年 3 月開講) の通信生であって、1923 年元日の時点で、渋沢の眼前に受講者はひとりも存在しない。だから、渋沢は、これからこの講習を受講しようとする者を想定して語っていることが明らかである。現実には、「開講の辞」の原稿起こしを担当する実業之日本社の社員を前にして語っているのであろう。

第二に、「開講の辞」の冒頭に、『龍門雑誌』編集者は、「本篇は実業之日本社内に於ける帝国実業講習会発行の『実業講習録』に掲載せるものなり」と注記している (前掲箇所)。したがって、これは、『実業講習録』雑誌版第 1 号 (のおそらく巻頭) に掲載されたのであろう。

第三に、『龍門雑誌』に掲載されている「実践商業道德講話」紹介記事は、この講話全体を要約したものではなく、講話の最初の四つの節 (「己に克つて礼に復るが仁」まで) のみを切りとった

ものである（渋沢栄一 1923b）。もちろん紙幅と版權の関係で、『龍門雑誌』に全文掲載することはできないのだが、『龍門雑誌』掲載時までこの講話連載はすでに完結していたと推定されるのに、あえて全体の要約ではなく一部分の紹介のみにしたのは、いくらか奇異な印象を受ける。この点については、いまのところ納得のいく説明がみあたらない。

- (45) 『読売新聞』第 19658 号（1931 年 11 月 12 日付朝刊）広告（2 面）。
- (46) 『読売新聞』第 19955 号（1932 年 9 月 6 日付朝刊）広告（3 面）。
- (47) 『実業之日本』第 31 巻第 6 号（1928 年 3 月 15 日刊）広告（35 頁）。
- (48) 『実業之日本』第 26 巻第 18 号（1923 年 10 月 15 日刊）「社告」（153 頁）。
- (49) 『実業之日本』第 26 巻第 19 号（1923 年 11 月 1 日刊）「社告」（147 頁）。ということは、地震当日（9 月 1 日）付で刊行された第 13 号はすでに発送されていたことを意味する。かりにこの日付通り 9 月 1 日に発送されたとして、地震発生は昼前なので、それ以前に発送作業は済んでいたであろう。ただし、無事に読者の許に届けられたものがどれだけあったのかは判然としない。
- (50) 『実業之日本』第 26 巻第 20 号（1923 年 11 月 15 日刊）広告（目次裏）。
- (51) （『実業之日本』第 27 巻第 2 号（1924 年 1 月 15 日刊）広告（目次裏））。

〔文献〕

安彦正一 2002 「竜門雑誌の刊行と渋沢栄一の関係について」 日本大学『国際関係学部研究年報』23
小野健知 1997 『澁澤栄一と人倫思想』 大明堂
渋沢栄一 1923a 「実業講習録開講の辞」『龍門雑誌』422
渋沢栄一 1923b 「実践商業道德講話」『龍門雑誌』422
渋沢栄一 1923c 『実践商業道德講話』 実業之日本社
『渋沢資料④』：渋沢青淵記念財団竜門社編『澁澤栄一傳記資料第 44 巻』 渋沢栄一伝記資料刊行会，1962 年
『渋沢資料⑧』：渋沢青淵記念財団竜門社編『澁澤栄一傳記資料第 48 巻』 渋沢栄一伝記資料刊行会，1963 年
渋沢史料館編刊 2010 『渋沢栄一と関東大震災——復興へのまなざし——』

〔付記〕

本稿は、平成 23 ～ 25 年度科学研究費（基盤研究（C）），および平成 26 年度佛教大学特別研究奨励費による研究成果の一部である。

（のぎき としろう 公共政策学科）

2015 年 4 月 13 日受理